

同志社幼稚園の思い出



穴戸圭一

いとぐち

同志社が、めでたく創設百年祭を迎えた昨年の末、私が講義に通っている同志社大学工学部工業化学科の末光教授を尋ねたら、書棚に百年記念の写真帖と、十年前九十年祭の時に出版された「同志社九十年小史」が並んでいた。これを見付けた私は、得意になって、「あなたは教授、私は非常勤講師に過ぎないが、同志社九十年史には私の写真が出ている。九十年史に写真がのっているのは、新島先生、歴代総長、ラーネッド先生などのほか

には、そうないんだよ」と自慢した。同書二三〇頁に今出川幼稚園の記事があり、卒業式の記念写真が掲げてあるが、その中に私がおり隣りに東大名誉教授大塚久雄君が写っている。

後日話であるが、私が京大図書館長を兼務することになった時、京大では創立七十年を迎えた。その記念事業の一つとして「京都大学七十年史」を出すことになり、職務上、私とその編集長に指名された。年史作成に当たっては、当然のことながら、他大学の歴史書を参考にしたが、会議の都度、休憩時を利

用し、机上にある「同志社九十年小史」写真の件を持ち出して自慢した。多くの中には幼稚園の私の顔を見分ける者もいて感心した。こんな話をするや否や、同教授は電話を掛けて「同志社時報」編集の方を呼び、私に「同志社幼稚園の思い出を書け」ということになってしまった。

今出川幼稚園の状態

「今出川幼稚園」は、現在でも「同志社幼稚園」として続いているが、私の入園した明治四十四年には、現在位置より少し南の方、電車が走っていなかった狭い今出川通りに面してあった。

有名な初期同志社の功労者ラーネッド先生の夫人が園長としてやっておられたもので、土曜日は休み、その代わり日曜日には日曜学校があつて、キリスト教のおしえを受けた。

ミセス・ラーネッド先生（門標にはラルネデと書いてあった。）は、自邸庭先きに私費で園舎を建てられたものだったそうで、「小さい組」、「なかの組」、「大きい組」の三年保育制、それぞれ女の先生が担任であった。申し訳ない次第であるが、「はやみ」先生というの



当時の幼稚園児

以外は、お名前も忘れてしまっている。

明治が大正になったが、明治天皇崩御の時、私は海水浴のため、天の橋立の宮津市（当時町）にいたことはまだ記憶にある。

幼稚園では各自の誕生日には該当人がまん中に座ってお祝いを受ける日があった。前記写真の中にいる川端道一君（故人、後の、ちまきの川端道喜の社長は、三月三日、雛祭りと同じ日にこの祝福を受けていた。

色々なことを教えてもらったが、「正方形」「長方形」、「鋭角」、「鈍角」などという語彙を、小学校で使ったら、先生がびっくりしたことがあった。「おり紙」というのは「織紙」で、テープ状の紙を布を織るように組み合わせるものであり、千羽鶴などの世間で言う「折紙」は「畳紙（たたみがみ）」と言うなどと、一般とは多少用語が違うこともあった。

アメリカの感謝祭の日に、ニンジンでジャムをつくる方法を教えてもらった。このラード先生（ネッド先生）の製法を家で母に伝授して作ってもらったこと、アルミニウムの丸型弁当箱を持参して食べたことなど、思い出は尽きない。

大正三年に卒業したが、九十年史掲載の写

真は、卒業式当日のものではなく、その数日前、ラード先生宅のすぐ前、平素は遊びに行ってはいけないという庭で撮ったものであった。手にしているものは卒業証書ではなく、単なる巻き紙である。

当時の風俗として、一般に洋服は少なく、男児は、幼稚園の時は和服着流し、時に前掛けをしており、小学校へ行けば袴（はかま）を付けたものであった。もっともこれは規則ではないから、小学校でも着流しの子も何人かいた。しかし、幼稚園の卒業式に当たっては、既に用意ができていた袴を付けて来る習慣になっていた。そのため、先生からは写真を撮る日には袴をはいて来るようにとの御注意があった。大塚久雄君はこれを忘れ、当日同君のみは着流しであった。後列に並んでいるので、判りにくいだが、こんなことが記憶にある。キリスト教の賛美歌、クリスマスの歌、その他の唱歌、今でも通用しているものがあって頭に残っている。

卒業生の後日物語

同級に桑木京子さんというのがいた。あとで母から聞いたところによると、有名な哲学

者桑木敏翼先生のお嬢さんで、同先生が京大教授であった時にお生まれになったらしい。京子さんは卒業の前に東京へ移られたが、これはお父さんが東大へ転任されたためであった。私が大学の三年生の時、その京子さんが夫婦共に病弱との理由で、心中をされたとの新聞記事が出た。御夫君、中村さんと言ったか、は東大応用化学卒、三共ベークライト技師、専門が私と同じであった。総合化学工業会社などのなかった当時、合成樹脂は人造絹糸と共に化学工業界の花形だったので、忘れられない記憶となった。幼稚園には、現在のPTAみたいなものがあつたらしく、私の母も、同窓のお母さんたちとは相識っていたため、新聞記事を見て、京子さんのことを教えてくれた。

今出川幼稚園には、私の妹や弟が次々と入園したし、それらの在園中は、卒業後も日曜学校へ通つたので、上下のクラスのことでも多少憶えている。

一年下の中瀬古和子さんがいた。お父さんの理学博士中瀬古六郎先生は、九十年史にもよく出てくる同志社関係者であったが、和子さんは、後、同志社女子大学音楽科の教授と

して、ピアノ、パイプオルガン、作曲を担当された方であった。先年なくなれたが、大東亜戦の少し前頃、ラーネッド先生追悼会が催された時や、その他の機会に何回かお目にかった。

京大での私の弟子が結婚式を挙げると言うので、都ホテルに招待された。新郎に対する祝辞を述べたら、次に新婦に対する祝辞となり、中瀬古和子さんが立たれた。それまで気が付かないでいたので、司会者の紹介にびっくりしたが、開口一番、「今しゃべったのは昔、『圭ちゃん』と言って、私の幼稚園の友達で……」と一同を笑わせ、「昔から立派な方で、こんな先生の薫陶を受けた花婿さんは申し分のない人に違いないと思う……」と、新婚夫婦にのみならず、私にまで、齒の浮くようなお世辞をいただき、何ともお恥かしい次第であった。

卒業後の訪問

大塚久雄君とは小学校は別であったが、中学へはいったら、また一緒になった。旧制高校も一緒だったが、大学では東西に分かれた。中学四年生の時、放課後共にミセス・ラ

ーネッド先生を訪問した。これについては、同君が定年退職の時、毎日新聞にか書いたことがある。同君の全集なるものがあるようだが、それにも出ていることと思う。

幼稚園は大正六年、現在の市電今出川線開通の時、南側を削られたので、現在の位置に移ったが、大正十二年、ラーネッド先生もアメリカへ帰られた。

昭和になつていたが、大学生の時、現在の幼稚園へ寄付金を持参して、園児さんたちと一時間ほど遊んで帰ったことがある。私の在園中に新規購入されたものであるが、大きな子供が乗ってはこわれるのでいけないと言われていたため、うらめしかったのである。特に記憶のあつた、いわゆる「赤ブランコ」が、これもせぜ健在であつたのはなつかしかった。

今でも同志社へ出講の帰途、時々まわり道して前を通ることがある。しかし存在していた位置が違うので、なつかしさは少ないようである。

(大学工学部嘱託講師・有機応用化学)